

・・・ 受難の新潟歯学部



「オッ、中原君！ 君の言うことはなんでも聞くよ」

時の宰相田中角栄は、開口一番、面会にいった中原 實にドラ声を張りあげた。中原が新潟県に2番目の大学を造ったことを知っていて、彼なりの謝意を表したのだ。巧みな人心収攬術 — 老練の中原 實も、この一言でコロリと参った。

昭和47年（1972）4月11日、新潟歯学部の初めての入学式を挙行し、ぶじ授業がスタートした。私は、教務部長と事務部長を兼ねていた。

その6月、新潟県校友会がイタリア軒で開催され、歯学部長、病院長、私が招かれた。同総会では、長老の岡田太衛助会長（14回卒）より、篤い歓迎の挨拶をうけた。そのあと懇親会の席上、中堅の校友2氏が、私のまえの豊にあぐらをかいた。酌とおもったら、一人が「新潟歯学部は、迷惑なんだよなあ」と吐き出すように言った。もう一人が、「そオ、迷惑なんだよ」と口を尖らせた。いきなり、頭上から冷水を浴びせられた…。開校して2ヵ月余、ホロ酔いまかせとはいえ、地元開業医の本音に凍りついた。

昭和49年（1974）5月、「あの分校は御荷物なんだよ」と、U法人理事の排他的な放言が聞こえてきた。彼は、新潟歯学部増設を決議した理事の一人だ。高齢の歯学部長は月1回の来新なので、実務を

取り仕切るのは、歯学部長代理の私だった。有言不実行の人の無責任発言は、笑止千万だ…。（新潟歯学部は、内外から15年20年後まで、時に悪気なく時に嫌味をこめて“分校”といわれた。）

昭和52年（1977）1月、電話口から在校生のうわづった声、「先生、新潟校はツブレルんですか?!」。私は、「そんなこと、100%ありませんよ」と笑いとばした。この種の問合わせや詰問は、子弟をもつ校友や受験生の父母からしばしばあった。1学校法人に2歯学部の日大松戸と日歯大新潟は、歯学部過多の格好の標的にされていた。新潟歯学部あと、国立4校・私立2校が、定員超過のベルが鳴っているのに、エレベーターにドヤドヤと乗りこんできた。閉校にするなら後からきた順にしる、と私は憤った。

かように、内外から新潟歯学部への風当たりは強かった。だが、御上の内々の要請をうけ、患者国民のために歯科医師過少に対応した第二歯学部なのだ。雑音など聞く耳はもたないと、私の反骨精神が昂然と奮い立った。

（写真：昭和47年4月11日、初めての入学式。本館前は寂しいが、まだ講堂がなかったので、式は本館4階の大会議室で開催された。入りきれない父母が、廊下にあふれていた）